

モード Mode は語る

中野 香織

産地の職人 世界へ飛躍

日本の伝統産業を主役に据えるブランド「MIZEN (ミゼン)」の展示会で新作に魅了された。螺鈿 (らでん) が織り込まれた生地を使った作品。光を受けて虹色にきらめき、空気を別天地に変える。

螺鈿織物を制作したのは、京都府の丹後にある「民谷螺鈿」の民谷共路さん。工房を訪れた。貝の内側の真珠層を薄く削り、木や漆面を装飾する螺鈿細工は世界中にあるが、糸にして絹に織り込むという螺鈿織物は類を見ない。1970年代に創業者の民谷勝一郎さんが2年の歳月をかけて考案した、引箔の技術を応用した独自の技法である。



螺鈿織物が使われたグオ・ペイの2019年春夏クチュールドレス ©Guo Pei

2代目の共路さんは研究を重ね、木やレザー、ミラーフィルムなど様々な素材を糸にして織り込むことにも成功。伝統技術を進化させ、斬新で未来感覚にあふれた織物を続々と誕生させているのだ。

そんな最先端の織物は、着物やバッグのみならず、パリのオートクチュールコレクションや高級時計の文字盤などにも使われる。多くの欧米のブランドと共働しているが、最初にパリに進出したのは2006年。数々の苦労を経て、13年のプルミエール・ビジョン特別ブースへの出展を契機に飛躍した。以後、技法を磨き、新素材を開発。伝統工芸という完成さ

螺鈿織を開発の民谷螺鈿

れた技術を守るイメージが強いが、民谷さんは発展の途上にある。

京都では職人も主体性を持ち、注文主と対等にやりとりするなかで製品を作ってきた。共働作業のなかで、それぞれが腕や審美眼を鍛えてきた。このプロセスにこそ、物づくりの醍醐味があり、だからこそ今に続く伝統が築かれたのではなかったか。

職人と注文主がともに主体性をもつパートナーとして協力するなかで革新的な美が生まれる。ひいては産業の持続的な発展ももたらされる。海外ブランドがますます日本の高付加価値生地を求めているが、産地の職人は素材を提供する下請けとしてではなく、名のあるクリエイターとして扱われることこそが伝統を未来へつなぐ。